

日本プロレタリア文学集・16



プロレタリア文学集・16

---

旗ナツプ作家集3

日本プロレタリア文学集・16

「戦旗」「ナツプ」作家集(二)

定価 二六〇〇円

一九八四年十月二十五日 初版  
一九八五年四月五日 第二刷

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒150 東京都渋谷区本町一の八の七  
電話 (〇三) 三三〇一七一一  
振替 東京 三一 三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社  
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。  
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・16

「戦旗」「ナツプ」作家集  
(三)



## 目次

### 鹿地 亘

兵 士 ..... 九

喜三太 ..... 三〇

労働日記と靴 ..... 三

火蓋を切る ..... 四

太平の雪 ..... 五

### 中野 重治

小僧さんの手紙 ..... 七

交番前 ..... 六

春さきの風…………… 七四

鉄の話…………… 八二

停車場…………… 九五

砂糖の話…………… 一〇三

根…………… 一二四

開 墾…………… 一二六

蝶つがい…………… 一五五

菊の花…………… 一六〇

村のあらましの話…………… 一六四

## 西沢隆二

野田へ行く…………… 一六七

お加代…………… 一九一

## 武田 麟太郎

暴力 ..... 二二七

連絡する船 ..... 二三五

反逆の呂律 ..... 二四〇

休む軌道 ..... 二四七

脈打つ血行 ..... 二五八

荒っぽい村 ..... 二七七

捕手 ..... 二九六

## 江馬 修

奇蹟 ..... 三〇九

黒人の兄弟 ..... 三二九

甲板船客 ..... 三三九

きよ子の経験 ..... 三五三

本郷村善九郎……………三九

解 説……………佐藤 静夫……………三二

発表年月日と掲載文献……………四二

鹿  
地  
亘



## 兵士

八月一日午後四時。

今、午後の調練を終る。

室内で九十四度。日が直射した赤土の練兵場は地獄だ。太陽とほこりと汗とで蒸しかえされ、しおれた草の先が眼にちかちかし、列を正す度に隣の男の肩とぶつかってよろよろする。中隊長の号令がやけにひびく。

伏せ！ 三百！

——敵は山の後！ 追撃！

べったりと焦土の上にたおれ、——俺達は立ち上り、俺達は足を引き摺り、息切れをしながら乾からびた喊声を挙げる。さらさらと磨きをかけた銃剣が眼をさす。

——意志を持つて居るものは誰か？

敵は誰か？

味方は誰か？

意識を持つて居るものは誰か？

——馬鹿！ きさま、銃を何と心得とる？ 言つて見ろ！

——はっ、銃は軍人の精神であります！

調練を終つて兵營に帰る時、ぐったりなつた体をささえ、一寸銃を地についた神鳥二等卒は、いきなり走りよつた小隊長からびんたを見舞れた。

軍人精神とは何か？

調練とは一体何の為か？

誰の為に？ 何の為に？

へとへと体を水道に運び、栓を口に押し当て兵士の群がはっはつと息をして居る。

——今日日射病でたおれたもの二人。

夜、衛生講話があることになつて居る。

S兄

今、僕は世界がどのように動いて居るか知らない。△△鉦山は兵營から西に當つて赤々と禿げ上つた斜面を見せ居る。入營直前、僕は坑夫達のストライキの情報を絶えずきいて居た。官憲と結託した鉦主側の圧迫に対して暴

動化した坑夫達を、今僕等の居る此の兵官の兵士達が、発砲して鎮圧したことを聞いて居た。だが、その後の成り行きはわからない。僕達は外界から遮断されて居る。争議は如何したか。南軍は何処まで進んだか。捕えられた学生達は判決されたか？

僕等に來た手紙は開封された上、班長の面前で渡される。僕達の出す手紙は検閲された上、状袋に入れられる。僕達の脳髓の隅々までが仔細に点検される。それに就いて面白い事実がある。君に話そう。

或る新兵の所へ、やさしい手紙がといた時、

——よう驕れ！ 驕れ！

一人の古兵がそう言ってからかった。二人とも人の良い、可愛い男で、古兵はいくらか自由主義者であつた。

ふむ、何……班長がにやにや笑つた？ ははははは。此の頃はそんなこつちや八釜しくないよ……昔は士気を乱すというんで小つびどくやられたさ。此の頃じゃ無暗に押えると士気が乱れるでな……なあに、いいさ、そんな手紙は却って士気を鼓舞するからな。尤も此の頃だつて、押えるには押えるがね。押える所が違つて來たのさ。

——押え所をね。まあ、飛んだ所で士気を鼓舞する様な奴さ。例えばあの△△鉾山の——

そう言いかけて古兵は、西の禿げ上つた赤土山を指した。夕陽が赫と映えて血を流した様な紅に染まつて居た。坑夫達のストライキは如何なつたか。僕達には全く消息がわからない。僕達は消息を遮断されて居る。

だが、僕達は平凡ながら外界の成り行きを察することが出来る。言い当てて見せようか。そんなにそれは難つかしいことではない。

僕等は毎日訓練され、引き廻され、へとへとにされ、考えることと感ずることを奪い去られ、たった一つの感情をだけしいられて居る。だが——わかる。色々なバロメーターがあるからだ。それに依つて僕等は外界の氣圧を計つて居る。

バロメーターの一はこうだ。

夜、時々講話がある。大抵中隊長が自分でやる。将校室の隣りの講堂、——壁には色々の統計が、ポスターが、所嫌わずに貼り付けてある。飛行機はアメリカが一等沢山持つて居る、陸軍は——海軍は——俺達は——軍艦を造らねばならない。俺達の誰もが喜んで費用を出し、俺達の誰もが、最も勇敢に戦わねばならない。米國と英國とはこんな大きな海軍を持つて居る。——そう言つた刺戟が素朴な心臓に、たった一つの感情を強いる為に、所嫌わずに張り付

けられて居る。その中に最近數葉のポスターが張り混ぜられた。危険思想防止宣伝だ。大きい掌の上でワルツを躍って居る人達を、掌の主が、にやにや笑つて居るという趣向だ。掌にはデモクラシーと書いてある。もう一つは爆弾を嚙じろうとして居る顔の絵だ。爆弾にはロシア製と書いてある。そしてもう一つは軍備縮少會議の絵だ。英米の全權は物凄い山刀をおしりにかくして居る。だが日本の全權は！——此のおしりにも、一つ日本刀をぶら下げなくてはなるまい。

中隊長は或時こう話した。

——軍備を縮少して戦争が無くなると思つたら大間違いじゃ。却つて反対じゃ。勿論我々は好んで戦争をするのではない。だが、各国の国民が各々その国を愛する以上、戦争はきつとある。

——軍備縮少とは形を小さくして内容を充実することじゃ。いやしくも我が国民は、——

——お前達は戦争に行ける特權を持つて居るわけだが、此の様な權利を持つて居る者は如何んな人達か。××一等卒。……そう。その通り、満二十歳以上、満四十歳までの男子。それ以上の者、或は不具者は、どんなに願つても隊にとられやせん。お前達は——

僕達は人を殺し、そして殺される特權を持つて居る。負傷をし、或は年老つて役に立たなくなるまでだ。有難い仕合せだ。特權を抛棄したくない者は誰か？

その後我々は、軍人に賜われる五ヵ条の勅諭を復唱した。最近中隊長はこんな話をした。

——我が国の莫大な人口を養う為には、支那は是非とも必要である。鉄と石炭——此がなくては戦争も出来ぬ——その大部分は支那から補充されて居る。支那革命は実に我が国のこの特權をおびやかすものじゃ。いやしくも我々は——

僕等は此によつて、支那革命が異常に進展して居ることを推察する。そして又軍備縮少會議が危機に瀕し、第二次世界戦の準備が刻々整えられつつあることを推察する。そしてポスターが一枚増す毎に、国内の解放運動が一步一歩進展しつつあることを知る。間違つて居ただらうか？

ではもう一つのパロメーターだ。

訓練を終ると僕等は毎日銃剣の掃除だ。

その掃除ふりと来たら、——殊に最近の検査の精密さと来たら、確かに危期の迫つて居るのを思わせる。何事か起つて居る——

磨いて居る銃剣のきらきらする光を眺めながら、いつも

僕はそう言つた恐怖を感じる。何事かを感じる。何事か。

何事か。容易ならぬ何事か。そして皆は夢中になつて銃剣を磨いて居る。軍人の精神——この銃剣が彼等の手に依つて、否、僕自身の手に依つて何人かの胸に擬せられる。否、僕自身の胸に擬せられる。血走つた、角のある眼と眼とが、剣と剣とが対峙する。僕等が憎んで居るだらうか、僕等は憎まれて居るだらうか。そしてお互は殺し合う程に恐れ合つて居る。何を？——皆は夢中になつて銃剣を磨いて居る。

——戦いに慣らされた兵士の様な——そう言つた譬えを君は覚えて居るだらう。危険の前に一切を忘れ、自分自身を忘れ、恐怖をさえ忘れて居る者の例えに。この様な譬えを僕は覚えて居る。彼等は平気で居る。——彼等は戦に慣らされて居る。——本当だらうか。いや、この譬え話の主は戦を知らない。憎しみもない者を殺さずには居られない、まっさおになった恐怖と恐怖との対峙を知らない。そして一体誰の為に？ 何の為に？ 誰の為に？

銃剣の掃除の厳格さの度合いは、かくて、僕等にとつて戦争のパロメーターだ。やがて銃剣に歯をつける為、加工兵の招集される日が近かる。一点の錆びは、締め木と寝台かつぎに価するだらう。上等兵の奴は——\*\*。

だが点呼だ、また書こう。

八月十日

月が出て居る。

営庭のポプラが揺れて居る。

みんな眠つて居る。

夕方いくらか微風が出たので、やや涼しい。皆はぐつすり眠つて居る。午後十一時。みんな此の人達は眠つて居る。

——S 兄

今日、一人の兵士を知つた。僕の中隊ではない。第二中隊の一兵士だ。知つたと言っても別に話した訳ではない。だが、今日その兵士に就いてのエピソードをきいた。それを書こう。

其の兵士の顔は入隊後屢々見て居つた。厳丈な、色の黒い、太い骨組みの、見るからに強そうな若者で、そして暗い顔の、入浴の際時々会つたが——ひどくむつとり屋らしく時々けわしい眼をして、顔をくもらせる。労働者だらうか、農夫だらうか。——その時はしかしそれ以上氣にも止まらなかつた。

毎日彼も訓練をされ、そして僕等も訓練されて居る。僕等は別々の中隊で、別々に訓練されて居るので、勿論話し等する機会はない。皆は毎日柔<sup>やわ</sup>なく訓練されて居る——

おおそう言え、このことばかりちよつとの間僕を不思議に思わせた。皆不平もない様な顔をして居る。勿論僕には幾らか軍隊のからくりもわかつて居たからだろうが、それにしても、余りに露骨な奴等のやり口には、思わずむかむかすることがよくあつた。それなのに彼等は平気で居る。此の中隊は先に△△鉱山の坑夫達を弾丸で以つて屈服したのだ。やがて彼等は誰を殺す積りで、そして一体誰の為に——毎日歪められた報導をきき、人形の様に操られ、怖ろしい教えを復唱しなければならぬのか。

恐ろしい教訓を僕等は復唱しなければならぬ。そうだ。軍隊では毎日この様に教えられる。第一に質素だ——質素。だが俺達の大部分は労働者と農民だ。此の上俺達の体から何を取り除こう。俺達は明日しぼられる労働の為に、わずかに今日の糧をおぎなつて居る。そして奴等は、貯金のことを、丸で軍人の義務の様に語る。貯金をせよ。国家の為に。一旦緩急ある時の為に。一旦緩急ある時の為に、国家の為に、俺達のわずかな糧を押しつめ、生命まで切りつめて、重い労役の前に自らを餓えるまで追いやり、その糧の為に血を絞る声を挙げるや否や射撃を以て答えた国家の為に。日日俺達は余りに国家に奉仕して居る。国家は俺達の労役で血ぶとりして居る。俺達の親と兄弟達が永劫の飢餓

にさらされて居る時に。

そして軍隊では信義を守れと教える。信義——俺達は信義を守らねばならぬ。俺達は人を疑つてはならぬ。たとい奴等は俺等をあやつり、友人たちを殺させる為に、——あそこに敵が居る——と欺こうとも俺達は奴等を信じねばならぬ。

そして俺達は礼儀を守れと教えられる。礼儀——奴等をおれたちは敬わねばならぬ。奴等は俺達の貪らん主人だ。然し、それでもやっぱり主人なのだ。俺達は主人に不敬であつてはならぬ。

そして俺たちは忠節を守らねばならぬ。忠節——このようなことをすべてが、全く忠節の正体だ、俺達は忠節でなければならぬと教えられる。そして俺達は勇敢であれと教えられる。

——勇敢。俺達が本当に勇敢になったなら、皆が本当に勇敢になったなら、——そして皆は、本当のことさえ知つたなら、勇敢になるにきまつて居る。殺せつ——と来た時に、否と答える様に勇敢になったなら——

だから不思議に思った。彼等は余りに平気で居る、と。所が僕は間違つて居たのを直ぐ発見した。彼等は決して平気ではなかったのだ。昼飯後の休み、それから夕方の休み

になると彼等の中三人或は四五人の塊りが、よく一所に——建物の蔭や、ポプラの木蔭で、話し合つて居た。最初僕は同じ郷里の仲の良い友達の集りだと思つて居た。一体何が話されて居るのか——僕が近寄つて行くと一せいに彼等は話を止めた。僕には友達がなかった。僕はひどく淋しい氣持になった。僕はどうして仲間に入れて貰えないのか——だがそれは直ぐにわかつた。というのはこうだ。或夜、消燈後だった。丁度此の様に月が出て居た。君が且つて見せて呉れた小説×××××を思い出して、僕は月夜、不封印列車を飛び降りて走るシベリアの脱獄囚の話をした。そして、少し調子に乗つて、当時の帝政ロシアの政治から、それと良く似た最近の××にまで言い及んだ。皆興奮して聞いて居た。そして最後に誰かが言つた。

奴等は勇敢にやつたんだな——

その時、当番の下士の足音が聞えたので、皆びっくり話を止め、そして間もなく眠つた。

翌日から、僕は彼等の集りに迎えられた。つまり、敵ではないことがわかつたのだ。そして其処には彼等の話があつた。えたいの知れない都会ものらしい男が、彼等の間で唯一の知識分子として、歓迎される様になつたのだ。そして僕は彼等が、意外に覚醒して居ることを知つた。彼ら

は彼等の敵を知つて居た。そして彼等は僕を幾らか物知りでもあるかの様に、そして又幾らか愛すべき御人好しでもあるかの様に、色々質問なぞあびせかけた。

こんな集りは各中隊の中に幾つづつがある。そして、その数は段々多くなる様に思れた。勿論上等兵の奴は怖ろしく、けち臭く嗅ぎ廻るので、余り多くの人数が集ること等不得策だ。それに奴等は俺達が集つて居ることを無暗に恐れるんだ。僕等は三人ずつ、五人ずつ、纔かの休み時間を散歩した。

——是がすべて、共產党の細胞であつたなら。——そう思つて僕にはほほえまれた。そして今日この三人ばかりの散歩の時に、暗い顔をした顔の兵士のことを聞いたのだ。——丁度僕等が管庭の梁木の方へ行く途中だった、あの若者は彼の同じ中隊の一人と僕等の前を横切つて行つた。

——坑夫の藤吉だ。

可哀そうにあいつこそ骨にこたえてるだろうな。

僕は坑夫の藤吉のことを聞いた。つまり彼は△△鉱山の坑夫の子で、彼も、それから彼の父も彼の祖父も、一生山であかがねを掘つて居たが、最近の争議の一斉射撃に際して、父と祖父とを失い、充分働くことの出来ない母と幼い弟とを残して、兵にとられて了つたというのだ。これは人